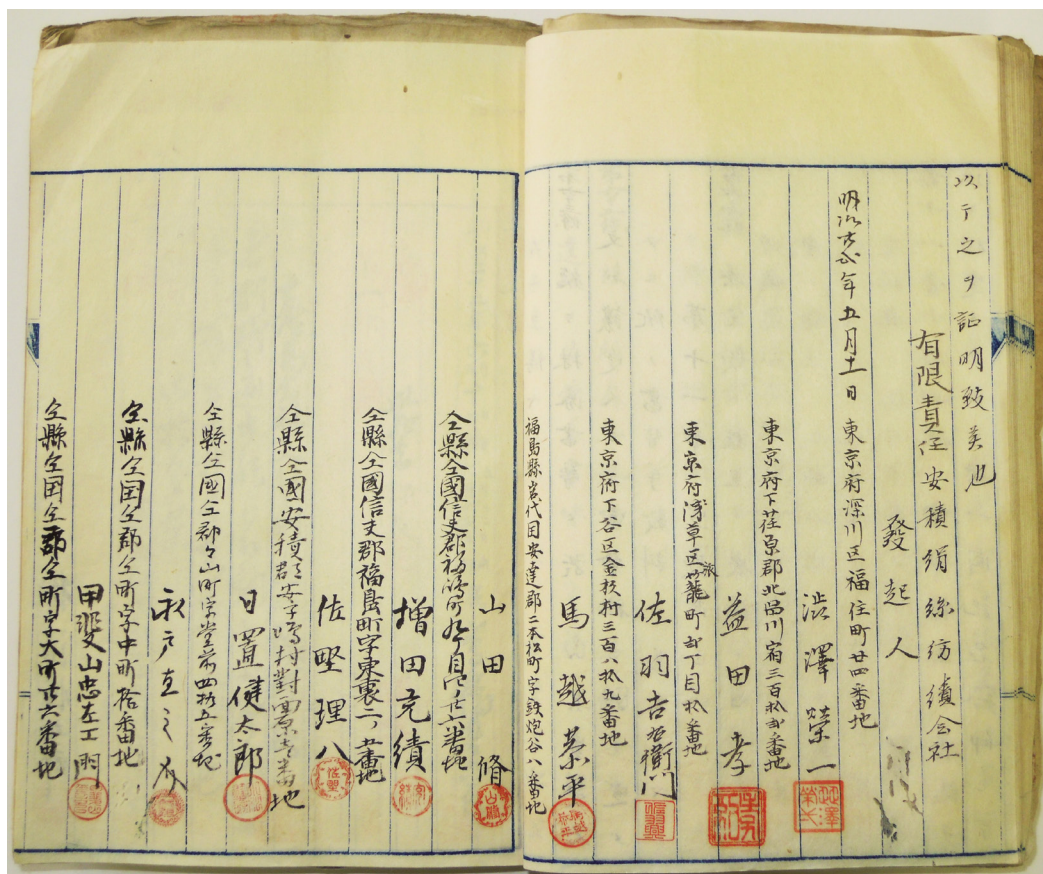


福島県史料情報

第60号 令和3年(2021)6月



明治22年5月11日付有限責任安積絹絲紡績会社定款(部分、『会社設置其ノ他』、明治・大正期の福島県庁文書3285)

有限責任安積絹絲紡績会社の設立と渋沢栄一

日置健太郎・永戸直之介・甲斐山忠左衛門・柳沼恒五郎など安積郡内の有力者四人を発起人惣代とした有限責任安積絹絲紡績会社設立願が、明治二十二年(一八八九)五月十一日付で福島県知事山田信道へ提出された。このうち永戸・甲斐山・柳沼の三名は、生糸を製造・販売する郡山正製組の発起人でもあった。この設立願には他に保証人として、地元政治家の今井久三郎、安積疏水関係人民惣代の國分伴内・伊東英助など四名が押印している。

同日付の定款によると、渋沢栄一・益田孝・佐羽吉右衛門・馬越恭平など全国的に著名な実業家四名、山田脩・増田充績・佐野理八など福島県内の実業家三名、先に挙げた四人の発起人惣代を含め合計十一名の実業家が発起人として名を連ねている。

この十一章六十四条からなる定款によれば、会社設立の目的は、洋式の器械を用いて屑繭や熨斗糸を原料とし、安積疏水を利用して絹糸を製造・販売することにあつた。会社は安積郡丸森村大字安子島字蓬山七番地(郡山市熱海町安子島字蓬山七番地)に設置され、有限責任という形態で、営業年限は二十年、設立の資本金は三十五万円であつた。

さらに同年六月十日には、定款に疑義がないことや疏水関係者の同意は取れていることなどから会社の設立を認可してほしいと安積郡長柳瀬易義は福島県へ補足の報告を上げている。これに対して福島県は、同年六月十九日に一般の会社条例制定まで結社相対約束にするという指令を出したのである。

なお、これまで有限責任安積絹絲紡績会社と明治三十年十二月に渋沢栄一が委員長となつて設立された郡山絹糸紡績株式会社を同一の会社として混同されることもあつたが、両社は全く別の会社であることを指摘しておきたい。

(渡邊 智裕)

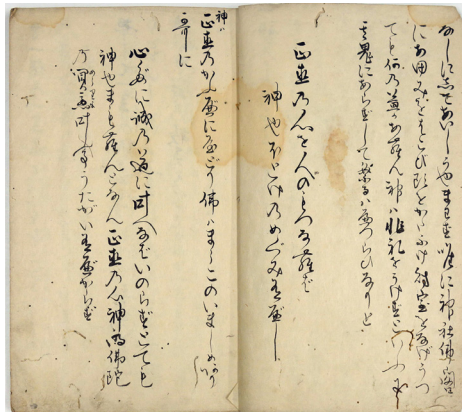
福島藩御用達小川家の家法と道歌

「小川清士家文書」は、福島藩板倉家の御用達をつとめた榎屋小川家に伝わる史料群である。

隠居した当主の満治が安永七年(一七七八)に著した一代記によれば、小川家はもともと会津若松城下の榎屋浜口慶伝家の奉公人で、元禄十五年(一七〇二)に暖簾分けによって福島城下中町に店を構えた。のち北南町(現在の福島市北町)に移り、生糸などを扱うかたわら質屋も営み、享保七年(一七二二)の大火の際に藩へ金五百両を上納し、同十四年に御用達となる。

この榎屋小川家には代々受け継がれた家法があり、「常ニ可心得事」として様々な心構えや決まり事が記されている。たとえば、次のような具合である(「家法記」、小川清士家文書九〇)。

- 一、銘々の家職をツトメ、其家を無事ニ治ルハ善人ナリ。
- 一、老ケ年の納り方、四ツ分ケテ三ツ分ニテ暮シ、老ツ分あましをけハ三年ニ老年分たまり、是を以不時之損失ありても家をつぶす事無シ。
- 一、借の一字、家をつぶす元と知ルベシ。



家法記 (小川清士家文書 86)

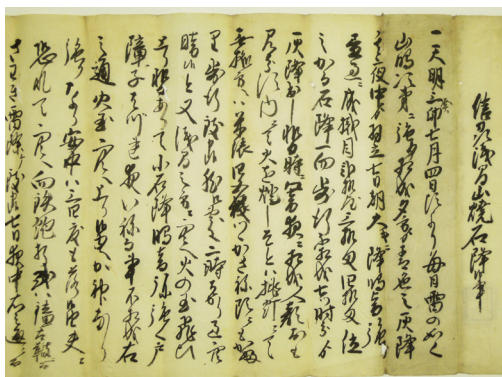
当分さへ不足ニて借りながら、年々利足を添て済ス事なれハ、末々家を失フ事必定ナリ。なかには「家を治ルには女のいふ事用べからず」といった今日の価値観に反する項もあるが、多くは現代でも通用する内容となっている。こうした家法を定めた一番の目的は子々孫々まで繁栄を重ねていくことであるが、その根底には正直さと誠実さを重んじる家風があった。それがよくうかがわれるのが次の道歌である(「家法記」、同八六)。

正直の心を人のもつならば
神やほとけのめぐみ有べし
心だに誠の道に叶へなば
いのらずとても神やまもらん
生き馬の目を抜くような商売の世界であつても、結局のところ最も大切なのは人間性というわけである。(山田 英明)

福島へ伝えられた天明浅間山噴火の情報

江戸時代には、地震・津波・噴火・洪水・飢饉・疫病・大火など様々な大規模災害が起きている。これらの災害情報は、手紙・出版物・風聞などにより被災地から遠く離れた地域へも伝えられたのであつた。

そのような事例の一つとして、天明三年(一七八三)に起きた浅間山噴火に関する記録を紹介したい。左の古文書は、信夫郡下大笹生村の豪農で福島藩板倉家の他所御用達を勤めた佐藤源左衛門家に伝わった文書群のうちのひとつである。これは、天明三年七月十一日に江戸の定飛脚問屋嶋屋屋左衛門によって記された浅間山噴火の様子を、他の人々が書き



天明3年(1783)7月11日付信州浅間山焼石降候事(部分、佐藤二郎家文書99)

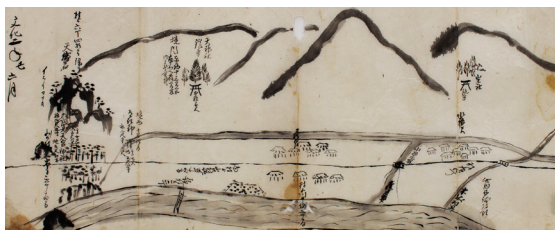
写したものである。時系列的に記録された浅間山噴火と逃げ惑う民衆の様子は、次のように具体的で臨場感溢れるものであり、噴火災害の特徴と恐ろしさを今に生きる我々にも余すところなく伝えている。

天明三年七月四日頃より毎日雷のような山鳴りがし、次第に強くなつて、夕方からは青色の火山灰が降り始めた。七日の朝にかけて多くの降灰があり、音はさらに大きくなり、昼過ぎには四十呎くらいの石も降り出して全く歩行も困難になった。辺りは闇夜のように真暗になり、人の顔の判別もできず、家の中では明かりを灯し、外では提灯を用い、空の米俵を被って頭を保護した。浅間山の方では空に火の玉(火山弾)が飛び出し、暫くして小石が降り始めた。山鳴りがさらに強くなり、戸や障子が外れ、夜も寝ることができなかつた。雷も強くなり、何度か落雷があつたので、人々は恐怖の余り空に向けて鉄砲を放ち、鐘や太鼓を打ち鳴らして雷を除けようとした。松井田での降灰は三尺も積もつた。利根川では火山噴出物による泥流型土石流(蛇拔)が発生し、民家・田畑・樹木・人・家畜などを呑み込み、空前の大惨事となつた。

この浅間山噴火は、東北地方における天明の大飢饉の一因となつたともいわれている。(渡邊 智裕)

会津郡大新田・水根沢 両村絵図と天狗岩の伝承

左図(酒井一家文書三四四)は、



〔会津郡大新田・水根沢両村絵図〕(酒井一家文書 344)

文化二年(一八〇五)六月に作成された村絵図で、北を左手にし、伊南川(絵図下部)東岸の会津郡大新田村(現南会津町、以下全て同町)・水根沢村が描かれている。絵図中央を枝分かれして北流する太線は用水で、並行する細線は沼田街道を示し、街道沿いに両村集落がみえる。用水から分水し伊南川へ注ぐ二本の水筋は村境で、南の水筋は木伏・水根沢両村境、北の水筋は水根沢・大新田両村境とあり、用水・村境に主眼を置いた絵図である。もう一つの

主眼は信仰対象にあり、水根沢村の鎮守山王社や大新田村の鎮守天神社・道祖神・大天宮神社(天狗神社)などが描かれ、境内地の広さ、社の高さ、鳥居の高さと幅を記載している。さらに、北端の大天宮神社背後には「天宮岩(天狗岩)」が聳えている。

地誌『新編会津風土記』によると、

天狗岩は高さ六丈(約十八m)、幅三十丈(約九十一m)に及び、前方に覆いかぶさる奇妙な形で、小石を食み出し、石は大きくなって岩を割り落ちてくる。地元でこれを「天狗の礫石」と呼ぶという。また、文化二年八月「御改三附書上帳」(前出文書三四六)には、天狗岩は北隣山口村との境「いらか崎(答崎)三つ石」に所在し「粒て石」が出るとあり、岩に向かつて大声を出すと返事があるため、この名で呼ばれていると記されている。なお、巡見使が廻村時に下問することもあるという。

巡見使に随行した古川古松軒は、著書『東遊雜記』で山口村の男天狗・女天狗岩に言及し、風の強い夜に天狗が集い礫を打ち合うという地元の話を記した。天狗の礫石は鼠色の良質な丸石で、生臭い臭気を帯びており、古川も貰って挿絵を描いた。また、別の巡見使随行者の記録には、天狗岩・天狗の礫石は近郷の崇敬の対象で、魔除けになるとある。

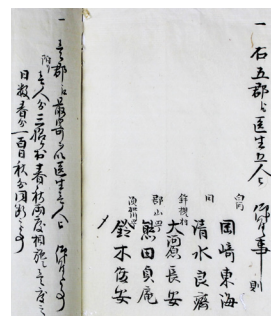
民俗学者柳田國男は、天狗岩の石を産む事象を地質学的に説明した上で、先人はこれを神業と捉えたこと述べている。加えて、本稿で挙げた岩の形状、こだま、礫石の形状・特徴なども神秘性を醸成した。本絵図は天狗岩を神聖視した心を筆に乗せ、描かれたのであろう。(小野孝太郎)

白河県の種痘に尽力した 清水良斎・岡崎東海

疱瘡(天然痘)は幾度も流行し人々

を苦しめたが、明治初期の全国的・統制的な種痘(予防接種)開始が大きな救いとなった。白河県では明治三年(一八七〇)三月初めに種痘御用を置き、同月十四日、白河中町の医師清水良斎・岡崎東海を同職に任じる。以下『諸綴込』(明治・大正期の福島県庁文書九一九)所収文書などによれば、両名は従来種痘を行ってきたが、未熟な医師や痘瘡を付け廻り証かす香具師により苦悩する人々を憂い、彼らの一掃と廻村による種痘実施を志した。県も怪しい医師などを問題視し、種痘御用から種痘を受けるよう村々へ命じる。結果、二月中旬から六月にかけ、清水は三四〇人余、岡崎は一三二人の白河郡の児童に接種を完了している。

だが、清水・岡崎は遠方で種痘が出来なかったのを悔いており、一層尽力するため、閏十月三日、大学東校(後の東京大学医学部)種痘館などでの修行を願ひ出る。許可が下り先に上京した清水は、往復二十三日で種痘論古説・新説を習練し種痘免状を得て戻った。成果を感じた白河県は、さらに四、五人の医師派遣と大々的種痘の実施を模索していく。



明治3年(1870)11月付種痘施療治所置 御答書(五郡医生任命の部分、『諸綴込』所収、明治・大正期の福島県庁文書 919)

帰県した清水は、郡山・須賀川・矢吹周辺で流行中の重い疱瘡に対処する。十一月三日に県へ上申し、大学東校から持ち帰った牛痘苗での接種を願ひ出ると共に、県民の種痘への疑念や牛痘への抵抗を払拭すべく各村での教諭を提案している。すぐに種痘御用の出張が決まり、清水は矢吹宿周辺の児童に種痘を施した。

他方、白河県は岡崎らに大々的種痘実施について諮問し、十一月に答書を受け取る。白河・石川・岩瀬・田村・安積五郡を岡崎ら五名で分担する案で、種痘日数・廻村・給与・罷免などが建白され、のち同志推薦や無給奉仕も建言された。そして、翌年二月、種痘医員として清水・岡崎・須賀川町鈴木俊安・同町桑名舜齋・郡山町熊田貞庵・保土原村(現須賀川市)大和田玄仲が任じられ、統制的で広域的な種痘が始まり、種痘医員と種痘の実施も増えていく。その後、清水・岡崎は白河県仮病院に勤務し医療への貢献を重ねた。両名の種痘への尽力で、多くの人が救われたのである。(小野孝太郎)

明治時代の学校体操

日本の初等教育に「体操」(体育)

という教科が導入されたのは、明治五年(一八七二)のことである。ただ、当時はまだ指導法が確立されていなかったため、政府はほどなく体操伝習所を設置し、アメリカのアマースト大学よりリーランドを招聘して指導者の育成をはかった。

その後、明治十九年の学校令により、尋常小学校では唱歌と合わせて週六時間が割り当てられることとなる。その一例を、同三十九年の史料

「体操 尋常第三学年同第四学年」(渡部八郎家文書一八六)によりながら見てみよう。ちなみに「尋常第三学年同第四学年」は現在の小学三・四年生にあたる年齢である。

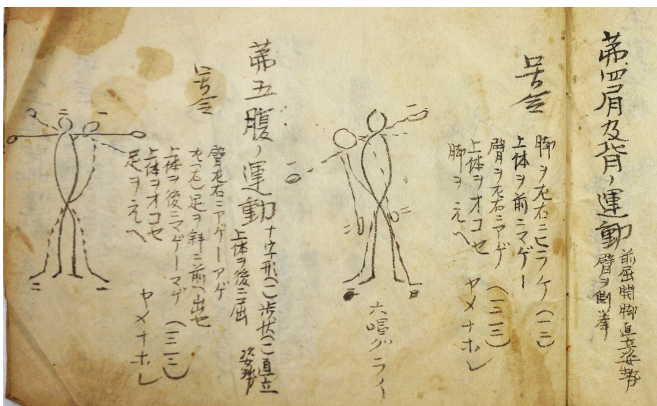
まず第三学年では、「準備体操」に始まり、「首胸ノ運動」「上肢ノ運動」「全身ノ運動」「肩及背ノ運動」「腹ノ運動」「腰ノ運動」「全体ノ運動」「下肢ノ運動」と上半身から下半身の順に体をほぐし、深呼吸にあたる「呼吸ノ運動」で締め括られる。現在のラジオ体操のような流れといえは分かりやすいだろうか。

第四学年も同様に「運動準備」を行った後、「首胸ノ運動」「屈臂運動」「全身運動」「肩及背ノ運動」「腹ノ運動」「上翼開脚運動」「全身ノ運

動」「下肢ノ運動」を経て「呼吸運動」で終わる。ただ、上級学年であるだけに、第三学年と比べると複雑な動きになっている。

たとえば、同じ「肩及背ノ運動」であっても、第三学年は「臂ヲ左右ニアゲアゲ、臂ヲ後ニマハセ、臂ヲ前ニマワセ」という臂を使った単純な動作であるのに対し、第四学年では「脚ヲ左右ニヒラケ、上体ヲ前ニマゲ、臂ヲ左右ニアゲ、上体ヲオコセ、脚ヲ元へ」というように複数の部位を続けて動かすといった具合である。

運動不足の方は、ぜひ本史料を閲覧し、お試しあれ。(山田 英明)



体操 尋常第三学年同第四学年 (渡部八郎家文書 186)

令和三年度行事予定

(令和三年四月～令和三年九月)

一、展示公開(収蔵資料展)

「歴史のなかの災害―地震・噴火・洪水・疫病―」

地震・噴火・洪水・疫病などの歴史的な災害に関する資料を展示し、人々がいかにして災害を乗り越えてきたのかを振り返ります。

【会期】四月十七日(土)～七月二十五日(日)まで

只見線復旧応援「奥会津の古文書

―只見町石伏・田子倉地区を中心に―

只見線の早期復旧応援のため、当館が収蔵する只見町の江戸・明治時代の古文書を展示し、只見川流域における山村の生活や六十里越の実態、事件・災害などを紹介します。

【会期】八月七日(土)～十一月三日(水・祝)まで

二、地域史研究講習会

歴史資料の保存と活用について関心を高めていただく機会として、三名の講師が各自のテーマで最新の研究成果を講演・報告します。

【日時】六月二十六日(土) 午前十時二十分から午後三時四十五分まで

【会場】とうほう・みんなの文化センター(福島県文化センター)小ホール

【定員】定員百名。

※六月八日に締め切りました。

三、古文書講座

当館収蔵の「往来物」を題材として、古文書の勉強法や古文書解読の基礎的な事柄について講義します。

【日時】七月十七日(土)、七月二十四日(土)、八月二十二日(日)、九月十二日(日)、各回とも午前十時～十二時まで

【会場】とうほう・みんなの文化センター(福島県文化センター)二階会議室

【申込・定員】葉書・FAX・メールのいずれかの方法で申込(六月二十八日消印有効)、定員六十名。定員を超えた場合は抽選。

四、資料閲覧について

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、前日の午後三時までに電話での予約が必要です。詳細や最新の情報はHPでご確認願います。

福島県史料情報

第60号 令和3年6月25日

編集・発行

公益財団法人 福島県文化振興財団

福島県歴史資料館

〒960-8116 福島市春日町5-54

TEL 024-534-9193 FAX 024-534-9195

URL <https://www.history.fcp.or.jp>

E-mail history@fcp.or.jp